林忠四郎先生の思い出ー林忠四郎賞設定の頃

杉本 大一郎1

前回は林研究室発足の頃のことについて述べたが、今回はずっと飛んで、先生の京都大学定年退官後のことである。先生は1995年に京都賞を授与された。その賞金からご寄付を頂いて、日本天文学会で林忠四郎賞を創設させていただいた。そのあたりの経緯を中心にして、先生の人となりの思い出を述べ、同時に林忠四郎賞創設の記録ともさせていただく。

1. 京都賞というもの

林忠四郎先生はエディントン・メダル(1970年, 英国王立協会),文化勲章(1986年)をはじめ、いろいろと顕賞を受けられたが、ここでは第11回(1995年)京都賞を受けられた頃のことを中心にして、私の思い出を語ってみる。

その前に、京都賞の性格などについて、少し説明しておいたほうがよいだろう。京都賞は、1959年に京セラ株式会社を創設された稲盛和夫氏が、その創立25周年を記念して約200億円相当を拠出し創設されたものである。学術賞だが、その趣旨はノーベル賞とは異なる。そのことは創設時に稲盛さん自身によって発表された「京都賞の理念について(1984年4月12日付)」の文書に示されている。少し長いが、その一部を引用してみよう。なお、その文章や京都賞授与に関する一連のことは、文献[1] や稲盛財団ホームページに詳しく載せられている。

その巻頭にも採録されているように、それは「・・・ 人類の科学の発展、文明の発展、又精神的な深化、高 揚の面に著しく貢献した人々に対し、京都賞を贈呈 し、・・・・(段落)この京都賞を受賞される資格者は、 京セラの我々が今までにやってきたのと同じように、 謙虚にして人一倍の努力を払い、道を究める努力をし、 己を知り、そのため偉大なものに対し敬虔なる心を持 ちあわせる人でなければなりません。また、その業績は世界の文明、科学、精神的深化のために、大いなる 貢献をした人でなければなりません。さらに、自分の 努力をしたその結果が真に人類を幸せにすることを願っていた人でなければなりません。(以下略)」という ことである。

こういう訳で、京都賞は一つのテーマに関する業績 (とその発展)に対する功績に与えられる学術賞とは異 なるものである。林先生は、その後2004年に、太平 洋天文学会からBruce Medalを授与されたが、それは "for outstanding lifetime contributions to astronomy" と生涯にわたる功績に与えられたものである。 京都賞 はそれらに加えて、努力・人格・文化への貢献も含め て、包括的な貢献に対して与えられる、より大きい賞 だと言ってもよい、こういう訳で、京都賞は毎年、先 端科学部門, 基礎科学部門, 精神科学·表現芸術部門 の3つの部門に、それぞれ一つずつの賞が与えられる. そのうち基礎科学部門については、数理科学、生物科学、 地球科学・宇宙科学、生命科学の四つの分野に分けら れる、そして年ごとに、順次一つを対象分野に指定し て推薦を受け、受賞者が決められる。その詳しいこと は、稲盛財団のホームページから見ることができる。

こういう意味で、趣旨にしても対象分野にしても、 ノーベル賞とは異なり、むしろそれと相補的とされている。それでも、京都賞の受賞者が後にノーベル賞を 授与されると、「京都賞の選考は「正鵠を得ていた」と 関係者が誇るのを見ると、どういうことになっている

^{1.} 林研究室大学院2期生, 1997年まで東京大学大学院総合文化研 究科, 2007年まで放送大学

のかよく分からないという気になることもある.

2. 林先生への贈賞理由と先生の受賞記念講演

贈賞理由の文章は4つの段落からなっている。それぞれで述べられているのは、1)基礎物理学を宇宙現象の解析に導入し、星の形成から進化までの一貫した理論を構築したこと、2)その中でも「林フェイズ」を発見し、それが重要な基礎概念になったこと、3)太陽系形成理論で京都モデルを提唱し、観測の飛躍的発展に伴って検証されてきていること、そして、4)宇宙物理学に新しい統一的な知見と一貫した理論を構築した、今世紀(20世紀)を代表する巨人である。とまとめられている。

林先生の学問的業績については、いろいろなところに解説があり、よく知られているので、ここではそれ以上のことは述べない。それに私が小久保編集委員から依頼されたのは、「業績よりも人となりや思い出を」ということである。

授賞式(1995年11月10日)の翌11日(土曜日)の午後には、一般向けの「受賞記念講演会」が待っている。その年の3人の受賞者、グレイ(George William Gray)博士(液晶に関する業績)、林忠四郎博士、ロイ・リキテンスタイン(Roy Lichtenstein)氏(造形芸術・ポップアート)の3人が順次登壇して話された。

林先生の話は、「私と宇宙物理学 - 研究の動機、方法、輪郭 -」と題するもの[1]で、先生が京都の旧制第三高等学校に入学された頃のことから始まる。東京大学の落合麒一郎教授研究室に所属して、ガモフやエディントンの論文を割り当てられたのが宇宙物理のきっかけになったこと、その後の素粒子・原子核の研究のことに続く。

話をおこした文章は引用文献[1]にある。全部で11ページの話のうち、宇宙初期の元素合成の理論($\alpha\beta$ γ -林理論)は2ページ、星の内部構造と進化は、林フェイズの発見の1ページを含めて、4ページ半、太陽系の起源は2ページを占める。自分の若かった頃の研究への思いが強いのは、誰にでもあることだろう。

同じことは、その10年後、2005年11月7~8日に京都大学基礎物理学研究所で開かれた研究会「学問の系譜-アインシュタインから湯川・朝永へ-」という研究会でも同様である、林先生の講演[2]は「宇宙物理

学の発展」というセッションで、「宇宙物理学事始」と題して話された。それは国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ(CiNii)から辿って、全文を見ることが出来る。著者名は杉本・林になっているが、私は活字に起こしたものと討論内容とを整理しただけである。その内容は、「事始」だから当然ではあるが、星の進化と元素の起源の話が殆ど全部を占める。

中でも先生がお好きなのは、「電子が(量子力学的に)縮退したコアを持つ星は赤色巨星になる」という先生の最初の論文(1947:前回に引用[9])に関することである。上に述べた京都賞講演会のときも、「電子の縮退を一般の人にどう説明しようか」ということに悩まれた。相談を受けたのは、私だけでなく、観山正見さんもだと聞いている。そして講演では、「パウリの禁制原理」という言葉まで現れている。林先生の真面目さも表している。

講演会の後、京都の「哲学の道」の近くにある京セラのゲストハウス和輪庵でのパーティーで、林先生のもう一つの側面を見た。宴たけなわになって、稲盛氏が京セラの新しいカメラや、通信回線で配信するカラオケの話を始められた。そして、受賞者は歌をうたって欲しいということになった。先生は困惑したような表情だったが、ついに決心して歌われたのが、旧制第三高等学校の学生歌として知られている「琵琶湖周航の歌」であった。

話を少し戻して、京都賞の講演会、国立京都国際会館の2000席に近い大会議場は満員であった。もちろん、聴衆のお目当てはいろいろで、リキテンスタイン氏のポップアートということもあったろうが、会場ホールで林先生の生涯にわたる写真に見入っていた人たちが多かったことからも、先生の話がお目当てだった方々も多かったと思われる。それに引きかえ、林研究室や天体核周辺の人は殆ど見かけなかった。一般向けの講演だから物理の専門家は関係がないというのも分かるが、学問・芸術の他の分野に比較すると、やや特殊な状況かもしれない。

そういうことをここに書くのは、次のようなことがあったからである。1982年に先生が文化功労者の顕彰を受けられたときの、文部省主催の一般向け記念講演会でのことである。私自身はあいにく大学での用事があって聴きに行けなかったので、妻に行ってもらった。題目は「宇宙の階層構造」だったらしい。講演

の内容で妻が覚えているのは、「雲は丸っこいと思った」と先生が話されたことだけだが、星だか太陽系の誕生だかを考えるのに、星間雲を先ずは球だか円盤だかで近似したという意味だったらしい。講演が終わって聴衆の間を通って退場されるとき、妻が「林先生」とか叫んだとのことである。私としては、先生がさぞかし迷惑そうな顔をされただろうと思っていた。しかし2008年になって頂いた回想録[3]には、「聴衆の中に、杉本夫人の薫さんを見かけた。」とわざわざ書いてある。知っている人が聴きに来てくれたのは、悪くなかったようである。

3. 林忠四郎賞の創設

京都賞には賞金が5000万円ついていると公表されている。林先生はその殆どを寄付するとおっしゃった。林先生は湯川秀樹先生に恩義を感じておられることもあって、その半分を湯川記念財団に、残りの半分を天文学会にということである。前者は佐藤文隆さんが、後者は私が取り次ぐことになった。

当時、私は天文学会の理事長と日本学術会議会員を兼ねていたので、1997年8月17~30日に京都で開催する第23回国際天文学連合(IAU)総会準備の責任者であった。何しろ2週間に及び、結果的には、62カ国から1935名(うち外国から1205名)が出席したという大きい総会なので、それなりの費用がかかる。一方、日本経済はバブルが崩壊して長い低迷期にあったので、募金もままならぬ状況にあり、総会準備に困っていることが新聞記事にも載せられたほどであった。

林先生はその状況をご覧になって、「杉本君もお金が要るだろうから、IAU総会に寄付しようと思う」とおっしゃった.総会の責任者としては有難いことではあるが、折角の京都賞の賞金だし、それにまとまったお金である.そこで、私は、「IAU総会だと、そのお金は使って消えてしまう.それよりも林忠四郎賞でも創設すれば長い間残るし、若い人を鼓舞して学問の進歩に貢献し続けることが出来ると思います.」という趣旨のことを答えた.「それもそうだ」ということになって、一度の会話でそう決まってしまった.金額のほうも、「息子さんにそういうことがあったと覚えておいてもらうために、ほんの少しだけを渡し、残りは全部寄付する.」とおっしゃったのだが、「先生のほ

うにも少しは残して、有効にお使いになることも・・・」 とか言って、結局は、湯川財団と天文学会とで2000 万円ずつに引き下げてもらった。そして、その後、日 本天文学会の特別会計で受けてもらうことに決まった。

ちょうどその頃、日本天文学会では顕彰制度を拡充しようという案が出されていて、そのためのワーキンググループが1995年10月30日付で報告書を出していた、そこには、天文学会は他の学会に比べて研究活動に対する顕彰制度が充実していないこと、一方では、各種の予算申請に授賞歴を書く欄が出来たり、学術上の表彰を受けた教官に対する(公務員給与の)特別昇給枠を文部省が設定したりして、対応しにくくなっているという意味のことが述べられていた。

その事情は物理学会でも同様であった。戦後、素粒子論グループなどが生まれて、研究の民主化、共同研究、研究者の立場の平等化などが進められた。そして、研究成果を発表するに際して論文の著者名はABC順にすべしとか、特定の人を顕彰したりするのは平等化の思想にそぐわないとかいう雰囲気があった。しかしその後、授賞歴だけでなく、論文の第1著者(first author)は誰かなどが言われるようになって、物理系でも状況が変わってきていた。

余分なことかも知れないが、私自身の事柄について言うと、連名論文での著者名の順序は次のようにしていた。初期はABC順で、Sugimotoは殆どの場合、最後になる(Hayashiは大抵の場合、最初になるが、例えばHayakawaがあれば、その後になる)。次期には、最もよく働いた(数値計算なども含めて時間を消費した)人を第1著者に、その後は、就職先を見つけるために売り出さなければならない人を第1に、そして職が上の人を最後にということにしていた。もっとも私が年をとってからは、最も働きの悪い人が最後になったということでもある。こういう訳で、私は特別の論文を除いて、しんがりのlast authorであり続けた。

話を戻すと、こういう状況が変わりつつある時期だったので、賞はワーキンググループ提案の「研究大賞 (仮称)」にのせる形で、その設定はスムースに進んだ、そして、1996年度の賞として、1997年3月京都での天文学会年会において、第1回の授賞式が行なわれることになった。その場には、林先生にもご臨席いただいた(写真1).

2011年度は, 第16回目の授賞になる. なお, 天文

学会では、同時に、日本天文学会欧文報告(Publications of the Astronomical Society of Japan)論文賞を設定した。これは、その後、「欧文報告」から「欧文研究報告」に呼び名が変わったが、同じ回数で続けられている。

状況に対応するために、当時の文部省・・給与班主査が送ってきた参考資料を見せてもらった。その別紙にはいろいろな賞の一覧が示されている。それは、ある程度難易度が高い賞の一覧と、難易度に関係なく若手研究者を対象とした賞の一覧とに分かれている。林忠四郎賞を設定する際に参考にした仁科記念賞は、後者の若手対象に分類されている。実際、その選考規定にも、仁科財団のホームページにも、「比較的若い個人あるいはグループ・・・を表彰することを目的とする」と書いてある。しかし実際には受賞者の年齢は次第に高くなってきて、著名な先生が還暦を迎えられた後に授与された例まであった。もっとも、連名だと、そのようになるのも止むを得ないという解釈もあったのだが。

一方、比較的若い人を encourage(鼓舞)するのは、その人の今後の研究の発展に期待するという意味から、ことのほか大切である。そこで私は賞の設定委員会の第1回(電子メール)会議で、基本的な考え方として「学問の新しい局面を開き、今後の展開につながりそうな研究を重視したい。比較的若い人で、まだmajorな賞をもらっていない人から選びたい。既存の賞の受賞者が高齢化の傾向にあるのに対し、若い人を encourageする必要があるから」と書いた。しかし結果的には、日本天文学会林忠四郎賞内規には、「若い」という文言は入らなかった。日本天文学会研究奨励賞内規に「35才以下の者」という文言があり、若手賞と呼ばれるものが既に(1988年から)あるというのが、その理由のひとつであった。

その結果、林忠四郎賞も受賞者の5分の4が授賞当時すでに教授の方になり、最もアクティビティーの高い助(准)教授時代の人が抜け落ちることになってしまった。こうなるのは、業績どうしを比較するという、賞の選考委員会がもつ宿命なのかもしれないが。

もう一つ、分野ということがある。内規では、「広い意味での天文学」とした。その解釈は人によって大いに異なるが、林先生が太陽系起源論を展開され、今で言う惑星地球科学の人たちと議論されたこと(中澤[4]を参照)を考えると、惑星科学の人の受賞がもう少



写真1: 林忠四郎先生と奥様. 第1回林忠四郎賞授賞式にご臨席 いただいた(1997).

しあっても良いのではないかという気もする. 内規では、天文学会員の以外の人にも選考委員を依頼することは禁じられていないし、「天文学会以外にも、・・・(受賞)候補者の推薦を依頼することが出来る」と明記してあるのだから.

林先生がこれらの事柄についてどう思われたかについては、結局は伺ったことがない。もっとも、伺っても、コメントはされなかっただろうとも思う。私としては、賞の選考委員会には(学問に対する)いろんな思想と価値観の人が入れ替わり就任すべきだし、賞の設定に関わった者が関わり続けるのは良くないとして、2年間で委員を退いた。そして林忠四郎賞のことは忘れていたので、どうなっているのかよく分からない。それでも、もう一度皆で考えて見るべき時期になっているのではないかと思う。

4. 林忠四郎賞のメダル

賞の本体は賞状である。普通はそれに副賞がついている。賞牌(メダル)は仁科記念賞にならって、芸術家に依頼して林先生の肖像を写真2のように制作してもらった。林先生に失礼にならないように、立派なものを作っておかなければならない。それに、賞の権威を定着させるための側面支援になるだろうという思惑もあった。最も大切なことは、どんなに立派な研究に授与され(続けて)いるかということだが、それはその後の運用次第で決まる。

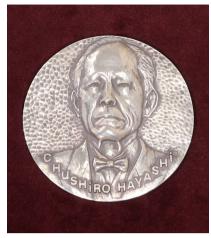




写真2: 林忠四郎賞の賞牌(材質は銀で直径7.5cm. 先生の肖像のパンチングによる浮き彫り.)表側と裏側.

その代わり、賞金の額は比較的低くさせてもらった.賞をもらう人は、芸術家と異なって給料を貰っているのだから、賞金の多寡は問題ではない。また、賞金は使うと消えてしまうが、メダルは残る、などの理屈をつけた。こうして、林先生から頂いた資金で、この利息のつかない世の中でも20年間は続けられると見積もった。この手の賞は利息でまかない、いつまでも続けるというのが普通であるが、そうはいかない低利率の世の中になってしまったということもある。現在、すでに15年を数えるようになっているから、そろそろ今後のことも考えないといけないのではないか。

話をメダルに戻す. 彫刻家で東京学芸大学名誉教授の橋本堅太郎さんに制作してもらうことになった. 妻の友人をとおして紹介してもらって, 妻と一緒にアトリエを尋ねた. 橋本さんはその年(1996)の日本芸術院賞を受賞された方で, その時は, 明治神宮神楽殿の狛犬を制作しておられる最中であった.

見本にした仁科記念賞のメダルは、橋本さんから見て兄弟子の円鍔勝三(えんつばかつぞう)さんによって制作されたものである。そして橋本さんは彼の後を次いで、日本芸術院会員に推挙されるであろう(直ぐ後で実際に同会員になられた、また2011年には文化功労者に選ばれた)とか、日展のための制作中とかでお忙しい時期であったにもかかわらず、林先生のご業績をご説明して、引受けていただいた。

メダルのデザインの案は、妻が仁科賞のものを参考 にして素描した、違いは表面に刻む名前をローマ字に したくらいのことである。先生の主な著作は英文論文だし、外国人にも名前が読めるようにという配慮である。そして、その字体をアメリカの大文字手書き流、すなわち、IやUを大きい小文字体、iやuにしたくらいである。そして、ちょうど京都へ行く用事があったので、私は林先生にもお会いしてご了解を頂き、先生の写真と書き物を預かってきた。制作は写真を元にして進めてもらった。立派な出来栄えだと思う。私にはそれについて批評する能力も立場にもないのだが、私から見ると、常の先生はそれよりもやや優しい表情だと思っている。

金型の制作とメダルの鋳造は、仁科賞と同じ株式会社日本金属工芸研究所の山田朝彦さんに、エクセーヌの盾に載せて桐箱に収めるところまでお願いした。少し詳しく書きすぎたようだが、どこかに記録を残しておかないと消えてしまうことを怖れるからである。

出来上がったメダルに第0回という番号をつけ、見本として林先生のところへ持っていった。出来栄えのことについては何もおっしゃらなかったが、「第0回というのはどういう意味か」と尋ねられた。番号をつけるわけにもいかないし、さりとて空白にしておくわけにもいかない。「ゼロは加法の単位元ですから」と言って、納得してもらった。そして夕食をご馳走になって、帰ったことを覚えている。

5. IAU (国際天文学連合) 総会のこと

日本も天文学先進国になったから、一度はIAU総会を日本で開催しなければならない。それにこれまでアジアで開催されたのは、1985年のインドのデリー総会だけだった。日本開催は、私がIAUのコミッション35(恒星の内部構造)のプレジデントに指名された、(Vice-Presidentの期間も含めて)1982~1988年の頃から考えていたことである。それをとおして、IAUの組織や人との関係が出来つつあった。

一方, 1988 ~ 1991年には, 古在由秀先生(当時 国立天文台長)が, 日本人で最初のIAU会長(IAU President)に指名されたこと, 私が1988 ~ 1997年に 日本学術会議の会員をつとめたことなどで, 日本で総 会を開催する機は熟していた. 日本では, 大きい国際 会議は日本学術会議が開催することになっている.

こういうわけで、1991年にIAUから日本での開催を打診され、翌年、学術会議から、1997年総会の開催希望をIAUに回答した。その後には、事務的にもいろいろと忙しい日々が待っていた。もちろん、それ以前にもIAU総会のことが考えられたことはあったが、責任者になる人が二の足を踏んでいた。大きい予算と大変な事務が必要になることがその理由であった。それに対し、私は生来の呑気さ加減のために、責任を引き受けてしまった。その代わり条件は、「若い研究者仲間でつくる」ということである。つまり、偉い先生をたてておいて実働は若い人がするというのではなく、若い仲間をたてるというものである。私自身は大して偉くないので、young at heartというわけである。そのほうが、日本の将来と若い研究者をencourageするのに役に立つ。

林先生は1993年の「宮中講書始」に招かれ、太陽系起源の京都モデルについて御進講をされた。その直ぐ後に、赤坂御所での晩餐に招待された。そこに林先生の指名で、佐藤文隆氏と私がお伴をすることになった。その前に、先生にIAU総会のことを話していたので、先生は気にして下さって、総会に皇室のお言葉を頂きたいことを漏らしたらどうかということもあった。

晩餐は魚類の水槽などがいくつも置いている大きい 部屋で、天皇、皇后も含めての5人であった。懇談は 和やかで気楽なものであったが、先生がやや緊張して おられる様子を、このとき初めて目にした、世代の違いでもある。このときは、もちろん、「お言葉」のお願いを口に出して述べたわけではない(それには、それなりの順序がある)。

同様な機会は、1995年に私が(林先生に推薦してい ただいて)学士院賞を貰った時にもあったが、皇太子 殿下との会話が効を奏したというわけではない。正式 には、総会前年の冬になって、宮内庁から学術会議へ の打診があった(その年の大きい国際会議の中から選 ばれる). そのときには、会場となる国立京都国際会 館との話も進んでいて、天皇陛下のお言葉を頂くには、 警備などでもいろいろと大変になることを聞いてい た. そこで天文学の長老の先生方とも相談した. そし て、お言葉をお願いすることになった. それには、前 回1994年のオランダ総会にはベアトリックス女王が 一部臨席されたし、その前の1991年のアルゼンチン 総会には大統領が一部臨席されたということもあった. 但し総会直前まで, 天皇のご臨席のことを口外しては ならないということがあり、その事務的取扱いには苦 労した. 寄付をお願いするとき, その会議は天皇のご 臨席があるものかどうかを気にする企業団体なども結 構あるからである.

そして総会本番の頃になって、「黙ってそんなことを決めたのはけしからん」というメールが飛び交ったり、「陛下が入ってこられるときに、起立しない」という動きがあったりして、責任者としてはその火消しに困ったが、当日は、外国人の常識にも沿って問題なく進行することができた。

総会の開会式に御臨席賜ることが打診されたときには、開会式のタイトな時間割当が既に決まっていて、困ることになった。しかし宮内庁からは「決まっているスケジュールを変更してもらうことはない」と言っていただいた。そこで、開会総会でのお言葉をいただいてから数時間、その後の両陛下を囲むお茶の会まで待っていただくことになり、その間は京都市がお相手をして下さった。お茶の会の出席者数は制限せざるを得なかったが、両陛下と個々に話させていただくのに長い行列が出来たし、外国からのIAU役員などの出席者にも好評であった。両陛下のほうは休む間もなく、随分大変だったことだと思う。私と妻はそれぞれが両陛下に付き添い、(専門的なことなどで)必要が起これば通訳もということであったが、実際はお傍に居るだ

けであった.

日本で大きい会議をするのは、その組織の決め方でいろいろと問題が起こる。IAUのほうは、総会を主催するのはIAUだと言う。他方、日本国のほうは、学術会議が主催するのだと言う。その予算をつけてくれるのだから、それも仕方がない。こうして、全体としては二重組織になる。その間の矛盾は、英語と日本語の違いに吸収させる。こうして、国内向けには、主催は日本学術会議と日本天文学会にして、IAUはその「母体」だということにした。

さらに学術会議と総会の実行組織の間も二重になる. そのために委員会の数がやたらと多くなり、その中に は飾りに近いものまである.

実質上の総会の運営は、日本側で設置する実行委員会で行なう。これはIAUの設置するLOC(Local Organizing Committee)と重ねる。私は全体の責任を持つ国内委員会(IAU で言うNOC=National Organizing Committeeと重ねた)の委員長ということになったので、LOCではex-officioであったが、LOC委員に入ってもらったのは、古在先生を除いて全て私より若い人たちであった。そして、私は公のところでは、可能な限り若い人の名前が表に出るように努力した。そして閉会後の打ち上げは若い人ばかりの集まりで、世話をしていただいた京都会館の担当課長が、「こんな大型国際会議は見たことがない」と言われたほどであった。

そうはいっても、偉い先生方や企業の方々に助けてもらわなければならないこともある。せっぱ詰まった問題としては、まず募金委員会がある。林先生にその委員長をお願いに行った。先生は「私よりも長老の先生がおられる、例えば藤田良雄先生」ということであった。当時、学士院の院長であった藤田先生は快く引き受けてくださった。そして学術会議側の組織委員会には名誉委員長として入ってもらった。それと共に、両先生を含めて、6人の著名な先生方に「顧問」になっていただいた。そして後に天皇、皇后両陛下のご来臨のときも含めてお世話になった。

会議開催のための募金は、当時の経済事情のこともあって大変だった。それを見かねた古在先生は、天文学会員や関係者に広く呼びかけてくださった。その結果、個人で100万円単位の寄付をして下さる方も現れた。私も責任上、同列にならなければならないと思った。

林先生が寄付しても良いと言ってくださったお金を林 忠四郎賞にしてしまったという責任もある。私はちょ うどその年に東京大学を定年退職したというので、若 い人たちが記念事業としてお金を集めて下さっていた。 そこでその一部だけを記念品にして、残りをIAUに 寄付させていただいた。だから、私の寄付は多くの仲 間からの寄付である。

古在先生の呼びかけは大いに効を奏して、個人募金は1500万円に達するというご協力をいただいた。それに企業から頂いた醵金からその一部を加えて1700万円にし、発展途上国などを含めて、経済的に困難な状況に置かれている出席者への旅費・滞在費の補助として配分することが出来た。もちろん、そのための予算はIAUの本部からもついていたのだが、それはseed moneyという解釈で、IAUとしてもLOCからの配慮を期待している。こうして、開催時に言われた「日本は物価が高いから」という困惑を一部跳ね返し、最終的にはIAUの執行委員会(Executive Committee)からも特段の感謝の言葉をいただいた。

古在先生も含めて私が旅費補助にこだわったのは、日本に外貨がなく、外国での学会出席などでも大いに困った時代を経験しているからである。極端な話は、私が1967年からNASAに行ったとき、そちらで滞在費(給料並み)をもらえるのだからという理由で、10ドルしか国外に持ち出せなかったほどである。立場が逆転してしまった今の若い人たちには想像もつかないかもしれないが、そのような国は数多かった。

何だかお金のことばかり書いてしまったが、科学上の内容のことは、IAUが設置する科学組織委員会 (Scientific Organizing Committees)と協力しながら、スムースに進んだ、開かれたのは、2回の総会、それぞれ5日にわたる6つの本格的シンポジウム、それぞれにテーマを決めた24の合同討論会、特別セッション、招待講演会、多数の部や委員会の会議、IAU組織の運営そのものに関する6つの委員会など、多数のことが2週間にわたって行なわれた。

総会のことについて、林先生は前回にも引用した回顧録[3]に、次のように書いておられる。「・・・老齢の私にとって毎日朝早くから出席することはできなかった。・・・(・・などの)講演を興味を持って聴講した。・・会館の控え室で、また晩餐会で、多くの外国人や日本人と再会し、語り合った。」林先生も大い

に楽しまれたことと思っている.

それでも、私には、もう一つ、よく分からないことがあった。林研究室とその後継のいわゆる天体核研究室の人たちは、一部の方を除いて、このIAU総会を作り上げるのに、積極的な参加はしてくれなかったことである。もっとも、その人たちも、科学シンポジウムなどでは、普通に外国などで開かれるものと同じように、お客様的に参加し、科学上では貢献したのだが、総会に関する諸規約の設定、準備と実行は東京が中心となって行なっていたが、京都でも会場やその割当て、社交的行事に関連して、厖大な仕事があった。それらは宇宙物理学教室の関係者が、その殆どをこなしてくださった。

そのような違いの原因が何処にあるのか、私にはよくわからない。考えられることは、私の組織力の不足、杉本は天体核の出身者だが5年間居ただけなので数のうちに入らないなどがある。そういうことなら良いのだが、気になるのは、林先生の「寸暇を惜しんで研究する」ということと、総会をつくるのに時間を潰すことの矛盾なのかもしれない。林先生の指導でそこまで言っておられたとは思わないが、指導が効き過ぎたのかもしれない。

なお、IAU総会の詳しい報告書は、学術会議に残されている筈である。大きい国際学会の中では、特に成功したものとして、今後の参考にするために特に詳しく報告して欲しいと頼まれた。報告者は委員長の名前になっているが、実際は、関係した人たちが報告し、全体については、実行委員長の福島登志夫さんと経理委員長の有本信雄さんがとりまとめてくれたものである。2分冊になっているが、150ページ余に及ぶ。

6. 最後に奥様のこと

私の妻は林先生の研究室が発足した当初に教室事務をしていた。それに、林先生がその後ずっと住まわれたところの近所に妻の親戚の者が住んでいたので、先生の奥様(写真1)のことも含めて何かと係わりがあった。

先生の若かった頃の研究者社会は随分昔風で、偉い 先生の奥様が配下の先生の奥様の社会を作ったり、支 配したりすることがあった。その事務当番が林先生の ところへ回ってきたのは、私が大学院生の頃であった。 それでも関係書類を入れた書類箱が、先生の本戸棚の 上に放り上げてあった。そしてその風習は大いに弱体 化されたようであった

同僚の先生方の家族を含めた付き合いもあった。そこで先生の奥様が、結婚してから映画に連れて行ってもらったことがないと言われたとか、赤ちゃんが泣き出すと自宅での研究の邪魔になるから、家の外へ連れ出て泣かせていたとかが、まことしやかに囁かれていた。事の真偽を確かめたことはないが、早川幸男先生との違いが目立っていたからそうなったようである。早川先生は、当時、子供を乳母車に乗せて預けに行ってから基礎物理学研究所に出勤された時期もあった。早川先生の自宅を訪問された林先生の奥様は、たまげられた。早川先生が皿を洗っておられたというのである。今では早川先生タイプのほうが常識になっているのだが、

そういうわけで、林先生は当時よくある亭主関白だと思っていた。ところが、そうではないことを示唆する事件があった。私が東京大学に移って間もなく、ある答案の字が林先生のものと余りにも似ていることに気がついた。名前を見ると林とある。さることがあって、私は連絡をとってみた。現れたのは、当時はやっていたように、髪を伸ばし、わざと汚い格好をした青年だった。

先生の奥様はそのような息子の事を心配しておられた. それに当時は,子供は(特に偉い先生の子供は)親に反抗するのが常識だった. そんなある日,奥様は交通事故に遭って入院されることになった. そして「先生に初めて優しくしてもらった」と私の妻が聞いた.

林先生が、見かけとは反対に、本当は優しい方だったというのは、その後何十年か経って思い知らされることになった。奥様は2007年にご病気で亡くなった、林先生は奥様(嘉子さま)の「一生の記録を子孫に伝え」たり、「嘉子のアルバムから良い写真を残す」ために、「伝記[5]を書き始め」られた。それを「親戚や友人に見せたところ、反響が大きかった」。これが先生自身の自叙伝を執筆されるきっかけになったとのことである。なお、このあたりに「」で括ったところは、それらの「伝記」[5]や「自叙伝」[3]からの部分引用である。私はそれらを両方とも頂いたが、お見合いの後、「二人は、ほぼ日曜ごとに合う瀬を重ねて・・・お互いの気持ちが良く通じ合うようになり、やがては熱き接吻

を・・・」とかまで書いてある(伝記). そして奥様が 亡くなられてからは、「(奥様が)家事万端を取り仕切 ってきた. お陰で私は、(・・・の役所等に)全然タッ チすることなく、研究に専念することができた. 私は 銀行のATM(自動支払機)を操作することも出来なか ったのである. (自叙伝)」そして先生の研究を支えて くれた奥様に、大いに感謝しておられる.

奥様が亡くなられたと聞いたとき、「お葬式には来ないでよい(というより来るなという感じ)」と言われたので、弔電で済まさせてもらった。先生の定年退職後もずっと一緒にゼミを続けていた3人の弟子が、ご夫婦でお手伝いに行っただけだったと聞いた。それでも、弔電を送った5人の弟子の名前は、「自叙伝」にリストされている。

その後、大分経って、私と妻が先生をご自宅に訪問し、線香をあげたときには、「どうして見舞いに来なかったのか」と私の妻に尋ねられたそうである(誰も知らせてくれなかったので、知る由もなかったのだが)、それでも直接に弟子に、そのようなことを言われることは決してなかった。また、帰る時間が迫ったとき、「まだ10分ある」とか言って、引きとめようとされた。それまでも先生をご自宅に訪問したときは、「研究の時間が減るのに、何をしに来た」というような顔つきだったと思ったが、本当は、そうではなかったらしい、先生は、不特定多数に対しては「私は100パーセント正しい」という感じであったが、相手が特定されているときにはつっぱったり、中澤さんが言うようにシャイだったり[4]のようである。

もう少し早く気付けば良かったのだが、遅すぎた、次にお目にかかったのは、病院でのことであった、2010年の1月も終わり頃になって、私の妻が、今年は林先生から年賀状が来なかったが、何かあったのではないか」と言い出した。その頃まで先生のご自宅で星形成などのゼミを続けていた2人の電話番号を探し出し、尋ねて見たら、「入院しておられる」とのこと、昔、暢夫ちゃんと呼んでいた息子さんの電話を探し出して尋ねて見たら、「意識がないので、見舞いに来ていただいても」ということだったが、無理に病院を聞き出して見舞いに行かせてもらった。

妻が先生の手を握って「林先生」とか言ったら、心なしか、先生の親指が何かを探るように動いた.常時 測定を続けている先生の心電図計の波形に、変化が出 たと私は思った. そして、「先生は反応出来ないだけで、分かっておられるのではないか」と勝手に解釈した.

ホテルへ帰ってから、京都在住で先生と親しかった 弟子に電話をして驚いたのは、先生がそのような状態 だということを(ゼミを続けていた2人を除いて)知っ ている者がなかったことである。

その1ヶ月ほど後、「葬儀は近親者のみで行なうから来ないで」と言われたにもかかわらず、私を含めて5人の弟子と4人の婦人が参列した。日本学士院からは天皇陛下のお使いとして一人が来ておられた。先生は最後までつっぱっておられたようだが、本当は寂しかったのか、知る由もない。林先生、あとは安らかにお休み下さい。

林先生の思い出と言いながら、私のことばかり書いてしまった。私が林研究室に居たのは大学院の5年間だけだったこと、それでも京都で長い付き合いをされた弟子の方々とはかなり異なる関係だったこと、思い出を語るためにはそのバックグラウンドも説明しなければならないことなどのためなので、お許しいただきたい。

参考文献

- [1] 稲盛財団, 1995, 稲盛財団:京都賞と助成金 第 11回.
- [2] 杉本大一郎, 林忠四郎, 2006, 物性研究86(3), 344.
- [3] 林忠四郎, 2008, 自叙伝(長い人生と宇宙研究の 回顧). 私的文書だが, かなり広い範囲に配布さ れた.
- [4] 中澤清, 2011, 遊星人19(4), 20(1), 20(2). 三回に わたる連載.
- [5] 林忠四郎, 2007, 林嘉子の伝記(一生の記録). 私 的文書.